石梨の木

宮柊二

石梨の木

短歌新聞社版

石梨の木　宮柊二歌論集

昭和47年1月25日発行

著　者　宮　柊二
発行者　石黒清介
印刷所　日本新聞印刷
発行所　短歌新聞社
東京都杉並区高円寺南4—43—9
振替　東京　21683番
電話（03）312—9185

定価 1600円

目　次

I

抵抗と充足……11
孤独派宣言……19
短歌的感慨……27
或る戦地詠——埋没の精神・覚書 1——……36
エホバの歌——同 2——……40
抒情詩論——同 3——……45
個性の含羞——同 4——……58
〈短歌美〉を内側より支えるもの……64
歌壇時評……70
新仮名遣論と芸術院賞
形式と詠嘆性

「わからなさ」について
結社理念の衰えと新しい気運
「春惜む――」―短歌的発想について― ……91
「歌の円寂する時」の前後 ……99
去年の雪いまいずこ――抒情詩と意味について――……108
憤り多い時代に生きて……120
現代短歌の類型感――内容・作品・享受の断絶――……128

II

生き生きした無名者の歌……133
新しい鎮魂の歌――無名者の歌たちについて――……137
人生とうたごころ……150
短歌に見る人生……158
かなしみを越えて戦ひの
味噌搗くと麹ねかせし
薄き身の睡らむ際に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

朦朧となりつつ
佇むごと詠みて
種油つぎたして読みし
幸なべて逃せし悔も
汗たらしわめく吾が手を
紺うつくしき
生くるゆゑ営みありて

酒の歌……188

高校生の歌……193

選歌随想……198

作家の二つの場合
美しさとそれへの関心
感動ということ
二つ
調べ

方法・技巧
才なくて
感動と表現――短歌のたのしみ――……209
朝日歌壇のうた……217

Ⅲ

歌の終焉……241
山鳩の声……257
自歌自釈――『晩夏』より――……260
私の手帖……268
古書翰
「賭け」ということ
音と型
旧文章・雛
友逝く
相撲……299

わが歌のはじめ……304
記憶三、四……313
わが青春の書――バーンズ詩集――……317
苜蓿の花……321
晩　秋……325
「もみじ」と歌の世界……329
ウナギのこと……334

Ⅳ

「概論」覚書――「白秋における悲しみ」の中――……341
抵抗としての白秋――が書けない弁――……347
白秋秀歌鑑賞……365
『椽』の世界……374
北原白秋の短歌について……389
白秋先生歌碑……402
白秋の脚……407

千鳥の啼き声……410
おもいで……413
新詩社派の歌……419
アンケート……423
『萬造寺斎選集』を読む……424
随想『窪田空穂全集』……429
春の歌三首……433
感　想……435
福戸国人氏追憶……438
佐藤佐太郎小論……441
吉野秀雄氏の文芸……451
日本人の短歌好き……463
初出目録……470
編集おぼえがき……473　玉城　徹
書名について……479　宮　柊二

石梨(いわなし)の木

宮柊二歌論集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

抵抗と充足

私は散文で語る時間があれば作品を思ってゆきたいのである。だから私はできるだけ散文を避けてきたのである。しかし書くこととなればどうしても、自分に問いかける独白的のものになり不普遍的のものになり勝ちである。ボソボソとしたものの言い方は自分ながら嫌だけれど、そうなるのだから仕方がない。正面きった言い方なぞは作家にとって作品以外に何が一体あるのだろう。常識の崩壊の中に生きながら、その崩壊の悲しさを詠えない切なさが満身を包んでいるから顔を上げられないのだ。わずかに、顔を風に向けて上げてゆこうとする場は作品だけなのに、やすやすと風俗の変化にばかり乗って詠い上げている。苦しそうなゼスチュアは何を語るつもりかはわからないけれど、詩の永遠性からすこしばかりずつ遠くなってゆくようで妙に寂しく味気ない気がする。

「信濃なる須賀の荒野のほととぎす鳴く声きけば時過ぎにけり」（『万葉』巻十四）「夏深き山里なれどほととぎす声は繁くもきこえざりけり」（『続後撰』）と仮に二首を抜出してみたところで、

われわれ末世の徒にはもうほとときすの約束が解らなくなっている。例えば、時鳥の鳴くのは五月一日から始まる暦日どおりに万葉人は考えた（折口信夫氏）、あるいは時鳥の鳴き声が季節によって区別されていて、普通、四月は忍び音、五月は己が五月として鳴き散らすものだ（峯岸義秋氏）という習俗の些細な諒解がわれわれに来ていねば「時すぎにけり」も「繁くもきこえざりけり」も判りがたいのではあるまいか。判りがたければ作者の感動内容は鑑賞享受の世界において具象を結成して来ぬのではあるまいか。

しかし、そうだからといって、それと、享受の世界において作品から受け取る充足感とは違う。判りがたいのは二首とも同じかも知らぬけれど、きらきらしい青空のような、文学としての充足感は「信濃なる」にはあって「夏深き」にはない。それは何によって来るのか判らぬけれど、一般論的に言えば感動的発想と理知的発想、独白的発想と対話的発想、さらに細かく言えば四五句における節調の差異などから響いてくるかも知れない。しかし、又さらに言えば根源的なものはもっとふかい所にあるかも知れない。あるような気がする。

西欧詩学に従えば、抒情詩とは「状態の独白的の表現」であり「瞬間的型式」であるといわれる。独白的の表現とは読者の待ち構えに阿（おもね）りのない孤りの作家抵抗であり、瞬間的型式とは素朴にして感動的単純発想法と解釈していいであろうか。もちろん、この西欧詩学の規矩をもって日

本の韻文を論じてゆくわけにはゆかぬであろうが、私個人の狭さに即いてものを言えば、このような見方において私は短歌を抒情詩と考えている者である。

作家抵抗と書いたが、だいたい作品というものはその作家の場合においては抵抗、享受の場合においては充足といった形で現われねば、作品として形成されぬのではあるまいか。抵抗とは外から来るものに対して内なるものを確立しようとする努力ではあるが、また言ってみれば風俗に対して永遠、無感動に対して衝迫、停滞に対して起動、昨日に対して今日、あるいは漱石が「私の暗いといふのは、固より倫理的に暗いのです。――其倫理上の考は、今の若い人と大分違つた所があるかも知れません。然し何う間違つても私自身のものです」（『心』）と言ったとき、ややその意味は不明瞭だけれど「今の若い人」の時代に背反して「私自身のもの」だとする我も、「一つ脱いでうしろに負ひぬ衣がへ」と告白的の短い意味内容を述べた時の芭蕉の悲しさも、皆そうだろう。創作にあたって意味内容と表現技術に抵抗を感じない作家なぞは、私は作家として信用しないのである。

われわれは短歌作家だから、表現すなわち短歌作品を通じて作家における感動体験の特殊性を鑑賞者の普遍性へ繋いでゆくのであろうが、この感動体験さえ激しい抵抗の中に揺られつつある、というよりも感動体験そのものをすでに激しい抵抗として感じとりつつある。応仁の乱を国

家歴史に誌したとはいえ、フランス革命を経ない民族成員の一人として、別にまた、例えば「君死にたまふことなかれ、すめらみことは、戦ひに　おほみづからは出でまさね、かたみに人の血を流し、獣の道に死ねよとは、死ぬるを人のほまれとは、大みこゝろの深ければ　もとよりいかで思されむ。」（与謝野晶子）と詠い放った明治三十七年の詩人を知っていて同じ詩人の「日の本の大宰相も病む吾も同じ涙す大き詔書に」の昭和十六年度作品に会ったものとして、あるいはさらにまた乱暴な例を引けば、神皇正統記所出の文章を古典として訓話せられた時代にいくばくも距たないで世田ヶ谷区民宮城参入の昭和二十一年春に逢ったような、こうした歴史と個人が好むと好まざるとにかかわらず動乱の中に統一を求めつつ激動しているときに、感動体験が抵抗として浮び上って来ぬ、ということはないのではあるまいか。

芭蕉は、俳諧し得る者の基準として掲げた六ヵ条の中に「一、歳四十を越えざる人」（「俳諧問答抄」）という年齢限に関する言葉を示しているが、俳諧し得るとは作家の謂であろう。作家とは創造もしくは発見の人格ではあるまいか。そして創造もしくは発見の人格とは鮮しい環境、新しい世界に立ち得る精神の母胎を指すのではあるまいか。ああ、鮮しい環境とか新しい世界とかは激しい抵抗の苦悩を伴わずに展け来るものではない。芭蕉はこの激しい抵抗の苦悩を、心と肉体に帯びて耐え得る年齢を「歳四十を越えざる」と発見したのではなかろうか。誇っていうのでは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com